
教育総合センター だより

NO. 123

平成 24.3.1

「先生方のご努力に感謝！！」

教育企画推進担当

参与 福 井 進



教育企画推進担当参与の福井です。役職の名称からは、何をやっているのかというのが、皆様の正直な感想だと思います。3年前の組織体制の見直しで、旧総務部の仕事を引き継いでおります。皆様に身近なところでは、学校耐震化工事を進めるという最優先課題の仕事にあたります。その他議会、人事も担当しています。来年度からは管理部に変わります。よろしくお願ひします。

さて、はじめて教育委員会に配属されて早5年になります。この期間で校・園長様から様々な学校・園の取組み内容や現状を聞かせていただき、折を見て学校・園の現場を見せていただいております。時に様々な事件の対応をさせていただくこともあります。そのような中で最近思うことは、教育現場でいろいろな課題があるのは事実ですが、先生方は学力向上や生徒指導など日々頑張っておられ、その努力により、近年着実に学校がよくなっているのではないかとということです。

長年、尼崎の教育の最大課題でありました学力向上について、全国平均という目標を掲げ、学校と教育委員会がそれに向けて一丸となった取組みを進めてきました。毎年検証がされてきた学力・生活実態調査でも、その甲斐があって先ず小学校から全国との差の改善が見られ、今では中学校もほぼ全国平均に到達したと言っても過言ではありません。小学校では校内で研究会を立ち上げ、詳細に分析をされて、教材の独自開発や、放課後学習など組織的に様々なきめ細かい取組みをされながら進めて来られた成果が出てきているものと思います。中学校でも難しい年代の生徒指導や課外活動に日々努められながら、各教科

の全体研究会を立ち上げられ、前向きに授業改善の取組みがなされています。このような並々な地道な取組みが短期間で大きく改善されてきた要因ではないかと考えております。

現在、兵庫県では、平成27年度から全日制高等学校普通科の全県5学区への学区再編が実施されようとしています。今までは、尼崎市の生徒は、尼崎の高等学校へ行くのが原則でしたが、学区が広がれば、駅近くの利便性のある本市の高等学校は、近隣他都市の生徒にとっても、当然、行きたい学校の選択肢になるでしょう。そのためにも、尼崎の一人でも多くの生徒が、近くの行きたい高等学校に行けるような学力を身につけさせてあげなければなりません。それぞれの校種の役割があることは当然ですが、例えば小学校が小学校で完結するのではなく、中学校や高等学校を見据えながら、中学校も同様により広い目をもって尼崎の教育機関全体が一人一人の力を伸ばしていただくよう、今以上の連携強化をしていただきたいと思います。

長引く景気低迷により、この影響を受けている家庭が多数あり、少なからず子どもを取り巻く環境にも暗い影を落としているのではないのでしょうか。そして尼崎市自体も、深刻な財政状況にあり、経費削減にとどまらず、給与削減から、人員や事業そのものの見直しを余儀なくされています。様々な面で学校現場にも、ご苦労をおかけしています。そのような中で、着実な成果を出されている先生方に心より敬意と感謝を表します。これからも「尼崎の子どもたち」の将来のために、引き続きご尽力をお願いします。

「絆」 ドラゴンボート体験記

和歌山マリーナシティで行われた「第12回和歌山ドラゴンボート選手権」に、本校教師24名で参加しました。ドラゴンボートとは、1名のドラマー、20名の漕手、1名の舵取りの計22名が一艘のボートに乗ってゴールを目指し、そのタイムを競う競技で、日本各地の海や川や湖で行われている老若男女が楽しめるスポーツです。しかし、参加したメンバーは漕ぐことはもちろん、見たことも聞いたこともなく、「ドラゴンボート」と「ドラゴンボール」の区別さえつかない状態でした。



とにかくにもみんなで「出るぞ!」の勢いのみで、水泳指導の終わった学校のプールで漕ぐ練習から始めました。もちろんボートはありませんから、プールサイドに一列に並んで座っての練習です。櫂は大学の部活から数本借り、それを使いました。なかなか雰囲気がかめませんでした。それでも数回練習をしました。結局、ボートに乗ることは一度もなく、本番で初めて乗りました。少し無茶だったかもしれません。

このスポーツにおいて私が大切だと感じていることの一つは、船の中の「連帯感」です。一緒に乗った人たちとは、話をしなくても、体力が少々違って、男でも女でも、ゴールという一つの目標を目指して進んでいけるということ。その中で無意識のうちに声を掛け合い、助け合い、支え合い、そして最後に笑い楽しめる。そんな雰囲気を大切にしています。楽しむことこそ、一番の「力」だと感じてい

ます。それは、私たちの仕事にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

また、「チームワーク」も大切です。このボートは、一人一人の技術が高くても漕ぐタイミングが合わなければ前には進みません。マイペースでは進まないのです。漕ぎ手全員が周りのメンバーのことを意識しながら、息を合わせ、漕ぐペースを合わせることで前進する大きな一歩になります。学校と教師との関係もこれに似た所があるのではないかと感じています。学校という大きな船を動かすには、教師一人一人の技術や気力も大切ですが、それ以上に互いの連携が必要だと思っています。

そして何より大切なのはボートの進路を決定する舵取りの存在です。これが一番難しいのです。簡単そうで誰にでもできそうなものですが、そう簡単にはできません。中途半端にすると、まっすぐには進みません。まっすぐに進めるには、コース全体を見渡す広い視野、決してぶれずに目標に向かって進む強い意志、漕ぎ手に与える安心感などが必要です。学校経営や学級経営などにも似たものがあるのではないのでしょうか。



今回、レースの順位は別にして、このドラゴンボートを体験したことで、改めて教師間の連携やチームワークの大切さを感じることができました。次回は、もう少し練習をして上の順位を狙ってみます。みなさんも一度参加されてみてはいかがでしょうか。

(園和北小学校教諭 森本 愛美)

被災地での2週間「学校は地域に浮かぶ船である」

はじめに

平成23年11月7日(月)から11月18日(金)までの2週間、本市教育委員会から派遣され、宮城県の気仙沼市立鹿折小学校で教育的な支援に取り組みました。この支援には、私の前に1人、後の2週間に中学校へ1人が派遣されました。

「教育的な支援とは、何をしたらいいのだろうか」と不安を抱えたまま現地に向かいました。

1 現地の様子

気仙沼駅までは、地震の影響を感じませんでした。しかし、宿舎になっていた海辺の旅館から、小学校に向かう道の両側はテレビの映像で見たあの光景が広がっていました。所々に家屋の一部がかるうじて残り、大型フェリーが道を遮断するように陸地に横たわっている光景です。

阪神・淡路大震災で職場も自宅も被災した私には、その時の記憶が蘇り息をするのも忘れる程の悲しい街の姿でした。

2 「感謝の心」を育む取り組み

重い気持ちになっていた私に元気を与えてくれたのは、子どもたちの元気な姿や声でした。学校に入ると、廊下の壁、階段の踊り場等掲示できるところには全国・海外からの応援のメッセージなどが貼られていました。応援メッセージに対しては、ただ受け取るだけでなく相手の心を感じ「感謝の心」を持たせたいという学校のお考えから、子どもたちは届けられる応援メッセージの全てにお礼の手紙を書いています。

「感謝の心」を育む思いと授業時数を確保して子どもの学びを保障したい思いのはざままで苦慮されながら努力する学校の姿に、本当の支援とはどうあるべきなのかを考えさせられました。

3 「学校は地域に浮かぶ船である」

震災当日の夜、鹿折小学校の子どもたちがどこに避難しているかを地域の方々はわかっておられたので、温かい汁物やおにぎり、毛布といった物資が届けられたそうです。子どもの心



に寄り添い、当たり前のことを当たり前のようにできる状態に早く戻ろうと必至に日々を過ごされたと聞きました。

被災した地域や保護者を元気づけるのは子どもであるというお考えから、校長先生が書かれた「がんばろう！鹿折小」をバックプリントしたTシャツを全員が着用し、マラソン大会が実施されました。好天の中、校庭を一周して学校の外に出て行く子どもの姿を見て大勢の保護者や地域の方々が声援をされていました。いっしょけんめい頑張る子どもの姿に元気を貰っているのだと感じました。

地域・保護者が元気になることが復興への一歩であるということ、地域に支えられて学校は教育活動ができるのだということを、私は「学校は地域に浮かぶ船である」という言葉とともに教わりました。

おわりに

私がさせていただいたことは、子どもの学習を支援するため出張で担任がいないクラスや少人数授業に入り授業をする他、津波でなくなってしまった書類の復旧作業をすることなどでした。たった2週間の被災地への教育的な支援がどれだけ役立ったのかわかりませんが、気仙沼市の、そして鹿折小学校のさらなる復興を祈念するばかりです。

家庭が被災され心身ともに大変な痛手を抱えておられる先生方も多くいる中で、子どもたちのために学校として一丸となって全身全霊で取り組む様子を目の当たりにして、教育の素晴らしさや大切さを学ぶとともに、改めて教育に取り組む姿勢はどうあるべきかを自分自身が深く問われた貴重な2週間となりました。

(学校教育担当 横山 智恵子指導主事)

ありがとうの言葉

ありがとう

面瀬小学校 五年 菊田 心

文房具ありがとう

えんぴつ、分度器、コンパス大切にします。

花のなえありがとう

お母さんとはちに植えました。花が咲くのがたのしみです。

うちわありがとう

あつい時うちわであおいでいます。

くつをありがとう

サッカーの時とってもけりやすく、いっしょうけんめい走ってます。

クッキーありがとう

家でおいしく食べました。

さんこう書ありがとう

勉強これからもがんばります。

図書カードありがとう

本をたくさん買いました。

やきそば作ってくれてありがとう

おいしくいっぱい食べました。

教室にせん風機ありがとう

これで勉強はかどります。

応援の言葉ありがとう

心が元気になりました。

最後に

おじいちゃん見つけてくれてありがとう

さよならすることができました。



この作品は、3・11大震災後に河北新報社が「ありがとうの詩」を募集し最優秀に選ばれました。

横山指導主事の言葉「数多くの支援が、今でも被災地に届いています。心からありがとうと言いたいのは、最後の三行ではないでしょうか。このような気持ち、現地にあるということ“支援しようとしている人”は知ってほしいです。そして、このような気持ち、表現できる子どもに育てていきたいと感じています。」

夜空を赤く染め、燃え上がる鹿折の町、立ち上る黒煙の中、飛び交う火の粉。次々と何か爆発する音が響いてきます。あの震災の日、僕は生まれ育った町が消えていくのを呆然と見ていました。

そんな中、体育館では避難してくる大勢の人々で混乱していました。停電のため、暖をとるストーブもなく、毛布が一枚あるだけ。病人やお年寄りもいて、着の身着のまま逃げてきた人々が、寒さに震え、身を寄せ合っています。僕は何かできないかと思い、また少しでも気分を紛らわしたい気持ちもあって、ペットボトルにお湯を入れ湯たんぽを配ることにしました。お年寄りや子どもにも優先的に配っている。湯たんぽはまださつきからずっと待ってただけ。」「この事情にも似た言葉が聞かれます。」「はい、すぐ持って行きます。」「とは言ったものの、みんなのものを思って持ってきちゃってるのに、感謝されるならともかく、なんでこんなことを言われなくてはならないのだろう。」「というわだかまりが僕の心に残りました。

それからおよそ一ヶ月後、学校が始まりました。みんなと会えるのはうれしいのですが、体育館は避難所、校庭は仮説住宅の用地となり、活動できる範囲が制限されるようになりました。こんな状況では例年どおりの行事などできはしません。僕たち執行部は悩みました。教室では「今年は行事ないの?」「去年やった企画、今年もやってみよう。」「みんなは生徒会長である僕に、いろいろな事を言ってきます。」「みんなのために頑張っているのに、勝手なことはかり言っている。」「とつい不満が出てしまいました。

僕の家は津波で流されたので、今はアパートを借りて生活をしています。以前に比べ部屋は狭くなりましたが、家族と話をする時間はかなり増えたように思います。

「みんな勝手なんだ。不満や要望を言うだけで何もしてくれない。おれたちも頑張っているのに……。」
「いつものように僕が家族に学校での様子を話していた時です。家族の前で不満をぶつける自分と自分に要望を言うてくる同級生の姿が、重なって見えたのです。みんなもやり場のない気持ちを聞いてもらいたかっただけなんだと、僕はこの時気づいたのです。そして、震災の時に僕の心に残った「わだかまり」についても考えてみました。(ポランティアをやっているとは言いながら、あの時の僕は「みんなのためにしてやっている」といっような、どこか上からの目線ではなかったのではないだろうか。だから、ちょっとした言葉が「わだかまり」になっていったんだ。)と反省しました。

人は心にあるつらいこと、苦しいことをただ聞いてもらうだけで、気持ち楽になるということがあります。僕も家族に話すことで心が軽くなりました。さらに、僕の不満を聞いてくれる家族から、同じ立場に立つて物事を考える大切さにも気づかされました。

今回の震災は多くの命や思い出を奪い去ったつらく悲しい出来事でした。しかし、この震災によって、僕たちは今までの生活を見つめ直し、これからの生き方を考える機会を得ました。今後は、僕たちが力を合わせて頑張る番です。今、生徒会の一員として自分たちができることは、同じ目線に立って、知恵を絞って意見を出し合ってみるなど協力していくこと。また、学校そして伝統といっものは、しっかりやっていくっていくんだというプロセスを先輩に伝え、残していくことだと思います。

「リスタート」。これは再出発という今年度の生徒会年間テーマです。僕たちは、このテーマの下、生徒・保護者はもちろん、避難所や仮説住宅の人々も交えた新しい行事を考えています。生徒一人一人が自分にできることを考え、実行に移していけば、鹿折中学校から地域に元気を発信していくことができます。学校から地域に広がる未来、これが僕たちの「リスタート」です。

この作品は、気仙沼・本吉地区の弁論大会で優秀賞に選ばれました。

また、気仙沼市立鹿折中学校は、生徒指導担当の前田裕司指導主事が二週間の教育的な支援のために行かれた学校です。



教育情報コーナーへどうぞ

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料等を整備しています。ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。今回は、尼崎に在住の著者の本を紹介します。


(情報コーナー担当・幾田)

『だんご虫のゆめ』

岩崎淳志著 空とぶキリン社
著者は武庫東小学校6年生。1年生から詩作を始め、こんなステキな詩集ができました。しなやかでみずみずしい作品の世界に浸って下さい。楽しい表紙絵、挿し絵も本人が描いたのものです。

「おそろいっていいですね」

「いっぽんのもみじの木
わたしはもみじの木です
わたしは
あきに
きれいなだいたいいろのはっぱをとばします
木にはいきものたちがやってきて
とてもにぎやかです
わたしはつこげませんが
とてもりっぱなもみじの木です
ゆうがたになると
わたしとおそろいのゆうひがさしてきます
そしてわたしははなしかけます」



『災害が学校を襲うとき～ある室戸台風の記録』上村武男著 創元社

今から78年前、昭和9年9月21日、室戸台風が関西地方を襲来します。この台風で学校は、ばたばたと倒壊し、そのうえ高潮に襲われました。著者は《学校災害》の視点からこの台風の悲劇を描き出します。児童の作文に、災害の恐ろしさが迫ってきます。全国図書館協会選定図書に選ばれています。著者は尼崎在住の作家、神職。作家活動のほか『尼崎市戦前教育史』の編纂にも参加しています。平成17年度尼崎市文化功労賞を受賞。

視聴覚ライブラリーBEST 5

視聴覚ライブラリーのご利用有り難うございました。12月までの貸し出し傾向をまとめました。多くは人権週間、夏休み前後を含めて行事等での活用をしていただきました。

・貸し出し教材<タイトル別> ヒロシマに一番電車が走った ワオくんのはね 勇気あるホテルととべないホテル お母さんの木 いのち輝く灯

(上位の貸し出しは「平和・戦争」の分野で人権教育の視点からの活用が多く、「童話・むかし話」が二位に入っているのは、公共機関のニーズが増えていることを示しています。)

・貸し出し教具 プロジェクター(36%) 16ミリ映写機(28%) スクリーン(24%) オーバーヘッド投影機(8%) スライド映写機(4%)

・利用者数別(6960人・4月～12月)

小学校(47%) 幼稚園・保育所(29%) 一般(19%) 中学校(5%)

(小学校の場合、全校あるいは学年・学級での活用が多いため、利用者数が全体の50%近くになりました。)

来年度も多くの方のニーズに対応できるよう努力していきます。毎年16ミリ映写機の講習も行っています。映写機を活用した団体からは、「子どもたちにとっては未知の機械で、光の帯が流れて映像が映ることに驚きの声が上がりました」と教えていただきました。16ミリのフィルムはたくさんあります。ぜひご活用ください。(フィルムライブラリー担当・上玉利)